



アメリカ童話から

23

松原至大

強い仔猫

あるところに、黄色の目と黒い鼻をもつた虎猫の仔がいました。とても小さな仔猫でしたが、ライオンのような強い心を持つていました。

ある日のこと、世界を自分の思いどおりにしようと思つて出かけました。歩き出した小道は、一つの大きなこもりとした森に続いていました。できるだけ頭を高くして、いばつて歩きました。

間もなく一匹の大きな狼に出会いました。「なにをまごまごしてゐるんだ。ぼくはお腹がすいているんだぞ。」と、狼はうなりました。狼がだれかを食べてしまおうとする時は、いつもこう言うのですから。

こうしたあぶない時に、勇気を出すことは、ほんとうによいことです。けれども落ちついて、利口になることは、もつとよいことですよ。この仔猫も、そのことを知つていました。そこで少しもこわそうな様子を見せないで元気にこう言いました。

「ああ、狼さん、ぼくは君を探していたとるですよ。ぼくのおばさんの虎さんが、仔羊をローストする仕方を君にきいておいでつて言つたのですよ。君の方が、おばさんよりもよつぽとよく知つていなさるつて、おばさん

が、言っていましたよ。」

狼はそう言われると、うれしくなりました。それでもまだ仔猫の言うことには気を許さないで、こうもいいました。

「おばさんの虎さんには、こう伝えておくれよ。『仔羊をローストするのは、仔猫をローストするのと同じだ。』つて。」

この言葉は、仔猫をびつくりさせました。けれども仔猫は少しも驚かないふりをして、言い返しました。

「なるほどね、狼さん。君がほんとうにそう言いなさいつて言うのなら、そうしますよ。けど虎おばさんは、気が短い方なので、君の言つたことをおこるかも知れませんよ。おばさんには親類の仔猫が、たくさんいますからね。」

狼は顔を洗いはじめていた仔猫をつくづくと眺めながら、

「ううむ。」とうなりました。

「仔猫をローストするにはサルピヤの葉とむねぎを使うとおいしくなるつて言つておくれ。」こう言つてから、狼はぐるりと向きをかえて、森の中はいつてしまいました。

仔猫は道を急ぎました。角をまがると、思いがけなく、その道の上にまたがった木の枝に、一匹の強そうな大蛇がいました。

「ちゆつ、ご馳走を頂こうかしら。」と、大蛇は口をならしました。

あなた方を食べてしまおうとする時は、いつもこう言うのですよ。

「あつ、ボア・コンストリクターさん(大蛇という英語ですが、それがこの蛇の名でした)ですか。」と、仔猫は言いました。「ぼく、すいぶん君を探しましたよ。虎おばさんが、鳥のつかまえ方を教えて頂こうと思つて

いるのですよ。おばさんは、君が一番上手だからつて、言っていましたよ。そのことで、なにか教えて下さいませんか。」

大蛇というものは、小さな動物をつかまえる時は、いつもおそろしい目で、じつとにらみます。そうするとその動物は動けなくなるのですから。

そこで大蛇は、

「私を見つめておくれ。そうすれば、わかるから。」と言いました。大蛇は、仔猫がまるまるふとついで、これはおいしいなと思つたのでした。

ところが、この仔猫は利口ものでした。大蛇の顔を見ないで、そのうしろの方を見て、こういいました。

「そうだ。虎おばさんがこつちへ来るかもしれない。」

大蛇は、うしろの方から虎にこられてはかなわなれないと思つたので、大急ぎであたりをからだで払いました。大蛇がうしろを向いている間に、子猫は森の中にかくれてしまいました。

元氣な仔猫は、どんどんかけて行きました。一本の大きな木を、ぐるりとまわると、虎に出会いました。

今度はこの仔猫も、すつかり勇氣がぬけてしまいました。息が切れて、胸がどきどきしてきました。けれどもうまい考えが浮んできましたよ。

「あつ、虎おばさん、ぼく、おばさんを探して、かけてきたものだから、息が切れてしまつた。ぼくのお母さんは、この次ぎの森にいるたつたひとりの金色の虎ですが、そのお母さんが、おばさんところの子供は、なにを食べて、あんなに大きくふとるのか知りたがつているんですよ。お母さんは、ぼくがこんなに小さいものだから心配しています。」

こう言つてから、仔猫はじつと息をこらえて、虎の返事を待つていました。

虎はしばらくの間、仔猫を見つめて、においをかいでから、頭を一方にまげて、考えこみました。やがて、なるほど、この仔は、大きさをちがうが、たしかに自分の子供に、よく似ていると思えました。それから、自分の子供たちは大きくなつてしまつて、今はいつしよにいないのだから、この子を自分の子供として、そだててやるうかなと思ひました。そこで虎は、お母さんのようにやさしく仔猫をなめてやつてから

「お前は、ほんとうに小さいね。もし私といつしよにお家にくれば、私がお前を育てて、できるだけ大きくしてあげますよ。」といひました。

二匹は、いつしよに出かけました。仔猫はこわごわながら大きな暗い森を通つて、虎の穴まで行きました。虎はそこで、仔猫にいろいろな肉と骨を食べさせました。仔猫はよく食べたので、だんだんふとつて、りつばな猫となりました。すると虎は喜んで、

「もうお前は、私の子供たちと同じ位になりましたよ。たしかにこの食べものが、お前によかつたのですね。」といひました。

それから仔猫は、その虎にかわいがられて、虎のお家で幸に暮しました。けれどどんなに大事にされても、一匹の猫としてよりは、決して大きくはなりませんでした。

(Peggy Bacon ペギー・ベイコン女史の作による)